



野尋禾のついのべ

その十六

(2010/12)

まえがき

” 野尋禾のついのべ その十六 (2010/12) ” です。

二〇一〇年十二月に書いたついのべ、21本です。

——と書いている現在、二〇一一年三月です。

年があけたどころか、冬が終わろうとしていて、そして、三月十一日を経験しています。

東日本大震災——

この日より前の世界は、まるで多次元世界の別の世界のようにです。

自分の作品を見直しても、どうも自分が書いたような気がしないほどです。

時事ネタなど、特にそうです。

読者にとっても、そうなのだろう、と思います。

できれば、これらの作品が、何か、いい思い出を思い出す鍵になれば、と思います。

あなたの暇を潰す柔らかいハンマー、または曲がるペンチ、それとも……

本コンテンツに収録された作品はフィクションです。

実在する人物、団体名などは便宜上、用いたものです。

実在する人物、団体になんら影響の及ぶものではありません。

ご了承ください。

収録作品はすべて、twitter で発表されたものですが、修正を加えたものもあります。

本ファイルに収録された作品の著作権は、野尋禾／nohironogi／佐々木秀博に帰属します。

2011/04/13

HP : http://www.geocities.jp/nohiro_nogi/

mail : nohironogi@gmail.com

Twitter : @nohironogi

彼は永遠の生命を求めた。

何年も研究室にこもり、消えた。

残されたメモによれば、彼は生物としての生に限界を感じた。

自身を数値化し、ウィルスのDNAに書き込み、渡り鳥に投与した。

そして、世界じゅうに拡散した、と――誰も信じなかった。

しかし、彼は、まだ見つかっていない。

2010/12/01 (Wed)23:55:12

したたか酔った――忘年会の帰り道。
年を越せるところまでこぎつけた満足感で、羽目を外した。
楽しかった……と、足がもつれた。
側溝へはまってしまった。
どこかに顔を打って、痛い。
出血しているようだ。
なんとか家に着くと、妻が目をむいた。
「ひいっ！ 海老蔵のオゴリじゃあ！」

2010/12/08 (Wed) 17:47:47

それは、怪獣だった。

怪獣としか言いようがなかった。

宇宙から落ちてきて、地上を破壊した。

軍隊が出動したが、通常兵器はまったく効果がない。

世界じゅうが、怪獣の行動を見つめた。

やがて、おずおずと日本政府から発表があった。

「あれは……”あかつき”です。帰ってきたのです」

2010/12/09 (Thu)00:30:42

NASAの重大発表は、研究者以外には拍子抜けする内容だった。

ところが、それが、他の話題を隠すための情報操作だったことが、内部告発で暴露された。

NASAの長官は、日本の習慣をまねて、頭を丸めて、謝罪会見に臨んだ。

ある新聞記者が、呟いた――

「NASA、毛、無い……」

2010/12/11 (Sat)23:08:44

毎月十四日はついのべの日。

今月のお題は” 極 ” ——

#twnovel

#twnvday

ここは、極東——流れ流れて、たどり着いた弧状列島。
大陸じゃあ、さんざ楽しませてもらったあたしも、年貢のおさめどきさ。
したいほうだいやってきたんだ。
これも必然さね。さあ、封印でもなんでもやっつくれ。
でもね、あたしが最後の九尾の狐とお思いでないよ。

2010/12/14 (Tue)21:43:36

#twnovel

#twnvday

女だてらに、極道に憧れた。

刺青、角刈り、縦縞のスーツ——いや、着流しでもいい。

毎年、書き初めに” 任侠” と書いた。

友達に意味を尋ねられ、あたしは、” 絶滅種” と答える——そう、やくざは絶滅した。

国民皆幸福法のもとに全国民が接続された、あの日から……

2010/12/14 (Tue)22:05:01

#twnovel

#twnvday

痛てて……いや、大丈夫。

胃が、ちょっと。

でも、薬のんでるから。

うん、けっこう効く……え？

漢方薬だけど。

はあ？

極微機械って、ナノマシン？

この粉薬？

植物じゃなくて、ナノマシンなの？

聞きたくなかったなあ……怖いくらい効くとは思ってたけど……

2010/12/14 (Tue)22:37:12

#twnovel

#twnvday

極端から極端へ――彼女は、いつも揺れ動く。

まるで空中ブランコ。

甘味処に通いつめてると思ったら、激辛のカレー屋の常連になってる。

コメディ映画に凝った後は、悲劇にはまって、目が潰れるくらい泣く。

だから、僕を誘うのは、イケメンと遊んだ後になるわけだ。

2010/12/14 (Tue)22:56:10

#twnovel

#twnvday

” 木” と言ったら、” 世界樹”。

その右に、天地を表す二本の線。

その間にある口、そして又(股)――これは、食べて出すもの、すなわち人間。

しかし、その真ん中を稲妻が引き裂いている――この象形文字が示すものは、終末観。

そして、そこへ至る道が、” 極道”。

2010/12/14 (Tue)23:28:58

長雨で、裏山が崩れた。

被害はなかったが、隠されていたものがあらわになった。

嚴重に封印された石の扉――古代遺跡のようにも、近代の構造物のようにも見えた

。

ひんやりする表面に耳をあてると、唸るような音が聞こえた。

裏山全体がコンクリートで固められた今も、微かに聞こえる。

2010/12/18 (Sat)22:21:31

「まだ来ないな。児玉はどう？」

「浪漫さ」

赤い月が世界も犯す。

夜が、よがる。

「止すか？」

重い枷がきつい……母さん。

「まろうどは、まだ？」

「来ないな、児玉」

まだこないな こだまはどう

ろまんさ

あかいつきがせかいもおかす

よるが よがる

よすか

おもいかせがきつい かあさん

まろうどは まだ

こないな こだま

「まさか……」

「いい！ つきなみなのも！」

「だけど雨だし……」

内諾、だいなしだ。

「メアド！」

けだものなみな、キツイイカサマ。

まさか

いい つきなもなのも

だけどあめだし

ないしょ だいなしだ

めあど

けだものなみな きついいかさま

2010/12/21 (Tue)22:18:38

「誰まち？ 今いく。どこ？」
「中野なう。その名も” まさじ” 」
思い汲む。
たしか孫。
「かぼちゃ？」
「違う」
「ガチ？ ゆず湯？」
「違うが、ちゃち」
簿価ごまかした報いも……おじさまなの？
そうなのかな。
孤独——いまいち、稀だ。

だれまち いまいく どこ
なかのなう そのなもまさじ
おもいくむ
たしかまご
かぼちゃ
ちがう
がち ゆずゆ
ちがうが ちゃち
ほかごまかしたむくいも おじさまなの
そうなのかな
こどく いまいち まれだ

街はクリスマス一色——いたたまれない。

そんなふうを感じる僕が、きっとマイノリティなんだろうな。

それにしても、さっきからクリスマスソングを歌い狂ってる、あの馬鹿はなんなんだ……はっ、もしや同志？

♪アイ・ウィッシュ・ユア・無理・クリスマス・アンハッピー・ニュー……

2010/12/23 (Thu)00:00:15

年賀状は家族写真、クリスマスにはイルミネーション――
そんな微笑ましい家庭でも、生活時間や、食事は、まるでバラバラだったりするらしい。

学者の調査だ。

言われてみたら、思い当たるふしがある。

綺麗にLEDを光らせてるあの家、子供が家出、両親が別居……今、誰も住んでない。

2010/12/23 (Thu)20:01:58

今日、大喜利に参加しなければ、リア充だと思われるかなあ、なんてツイートしてる赤い服の老人。

やる気がない。

NORADのオペレーターがリプライー注意一秒けが一生。鼻で笑う老人。

と、櫓が大きく揺れる。

放り出される老人。

となかいがあざ笑う。

「じじい、どこへ落ちたい？」

2010/12/24 (Fri)22:16:17

「予感……マジで、ラブ。定番」
「強い探偵が、ふたり来ても？」
「今は、マイ・モテキ！ タフガイ！ 天体！」
「よつんばい、手ブラで自慢かよ……」

よかん まじで らぶ ていばん
つよいたんていが ふたりきても
いまは まい もてき たふがい てんたい
よつんばい てぶらでじまんかよ

2010/12/25 (Sat)01:40:12

日が短くなり、空気がしんと冷え、今年もまた、あれがやって来る。

我々は無力だ。

なすすべもなく、迎え入れるしかない。

「もう、そこまで来てる」

「早すぎる」

「いつも、こうだ」

「なんで、こんなことに」

暗い顔で呟く大人たち。

「はっ！ 前線より入電――主ハ、主ハ、来マセリ！」

2010/12/25 (Sat)12:58:02

お父さんが穴を掘り始めたのは、半年前。
会社を辞め、スコップ一本で掘り続けました。
母屋は、残土で埋まっています。
昨日、お隣さんが、庭で石油を掘りあてました。
お父さんは、穴掘りをやめました。
お隣に、油脈の所有権を主張するそうです。
体当たり、体当たり、と呟きながら……

2010/12/28 (Tue)08:42:14

五二年目の定例会議。

長老の一人が呟く――嫌な予感。

その一言で、都市は放棄。

新たな土地に新たな都が建設される。

そして、また五二年後、都市の存続が諮られる……

忽然と消えた民族の歴史はそのようなものだった。

移動は続き、今、最後の塔が天へ伸びる。

六三四メートルの高みへ。

2010/12/30 (Thu)21:13:47